

審査の結果の要旨

氏名 志田絵里子

本論文は、レオ・シュトラウス (Leo Strauss 1899～1973) における「特殊性」と「普遍性」の関係について、彼の主要な議論である「哲学」、「自然」、「リベラル・エデュケーション」、「エソテリシズム」の各視点から検討し、現代の教育哲学への示唆を得ようとするものである。

第1章では、シュトラウスにおける「特殊性」と「普遍性」の内実をそれぞれ検討し、「特殊性」はユダヤ人としての特質に関わっており、シオニズムに典型的な宗教性を有しているのに対して、「普遍性」は、対立や混乱といった政治的活動が終了した後に到来する均一性を本質とする状態であるとされる。そして、「特殊性」は「啓示」から、「普遍性」は「哲学」から導出されるものであることと、「啓示」と「哲学」の対立が解決不可能であることから、「特殊性」と「普遍性」とは相互に還元不可能な相剋性を内包していることが明らかにされる。

第2章では、シュトラウスにおける「哲学」の内実について、クルト・リーツラー論と、シュトラウス・コジューヴ論争を通じて検討がなされる。シュトラウスによれば「哲学者」の「知恵」は、「哲学」と「政治」の緊張関係に基づき、「自然」に依拠して「真理」を探究する知的活動から生じるものである。そうした立場から、哲学と政治の対立が歴史の過程において止揚されるコジューヴの「普遍同質的国家」論が批判され、「特殊性」と「普遍性」の間の相互に和解不可能な関係の絶えざる照合としての哲学的探究がシュトラウスの思考における中心をなすことが明らかにされる。

これを踏まえて第3章では「哲学」と密接な関係にある価値基準としての「自然」概念が検討される。シュトラウスにおける「自然」は、「哲学的探究の生」を可能とする場であり、そのような「自然」に常に立ち戻ることによって、本来的な哲学的思考が展開され、それによって、「特殊性」と「普遍性」の間の架橋がなされるという。

以上をもとに、第4章ではシュトラウスの教育論、特にそのリベラル・エデュケーション論が検討される。「哲学」の準備であるリベラル・エデュケーションには、「哲学」を通じて、絶対的経験たる「啓示」に向かわせる作用があることが明らかにされる。その際に鍵となるのは、哲学者が迫害を回避するための著述の技法として採択した「エソテリシズム」(秘儀)である。このエソテリシズムに則った「注意深い読み」に支えられた哲学的探究によって、「特殊性」と「普遍性」を架橋する新たな視座を得ることが可能になることが明らかになる。

従来、アラン・ブルームに代表される古典教養主義の先駆けとして位置づけられることの多かったシュトラウスのエソテリシズムは、本研究によって、ユダヤ的な「特殊性」と近代的な「普遍性」の両者を架橋する鍵となる方法として捉え直される。それによって、教養教育を、近代性が封印してきたユダヤ的啓示の系譜とギリシア的哲学の系譜の相剋の顕在化と架橋というパースペクティブの中にダイナミックに位置づけ直す見通しが示された。この点に本論文の学術的に固有の意義が認められる。以上により、本論文は博士(教育学)の学位を授与するにふさわしいものと判断された。